

マタニティライフ超体験記

椎葉 美香

川畑産婦人科助産婦(大阪市住吉区)

私が助産婦になって、今年で9年目になります。私が助産婦になったきっかけは、高校の進路決定の時に父が言った、「これからの時代、手に職をもっているほうがいいから、看護婦になったらどうだ!?’という一言でした。小さな頃からお産に興味があった私は、それなら助産婦になろうと思い、看護学校を受験することにしました。

入学はしたものの、看護の世界は厳しく、何度もくじけそうになりました。卒業を前に、進学か就職かを決める段階になった時、「もう実習はこりこり」と思いながらも、やっぱり助産婦への夢は捨て切れず、「あと1年がんばろう」と決意し助産婦学校への進学を決めました。1年間という短い時間内で知識と技術を詰め込んでいくのですから、本当にハードな毎日でしたが、自分の好きなことをしているせいか、楽しくもありました。

卒業して助産婦になっていろいろありましたが、何人赤ちゃんをとりあげても、赤ちゃんが生まれてくる瞬間、“助産婦になって良かったなあ”と思います。

私のマタニティライフ超体験

私自身は、平成7年1月に長男を助産院で出産しました。妊娠がわかったのは、助産婦として働いて5年目の時でした。仕事柄、妊娠・出産に役に立つ知識が多いから得だと思っていましたが、いざ妊娠すると、頭でっかちなだけで、自分のこととなると知識は役に立たず、ダメですね。

妊娠がわかると同時に出血が始まって、初期から切迫流産で入院することになり、好きな仕事も

休まなくてははいけないし、いつまでたってもお腹の脹りはとれず、ひたすら安静の日々。想像していた“バラ色のマタニティライフ”が音をたてて崩れ落ち、ただひすら37週に入るのを指折り数えて待つという生活でした。

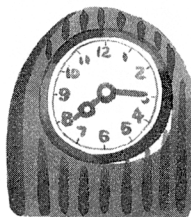
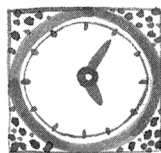
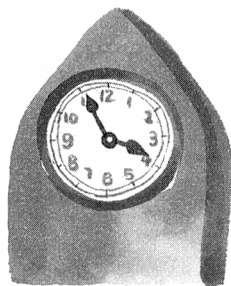
そんな私が助産院での出産を決めたのは、切迫流産で入院中、白い壁の小さな部屋で過ごす毎日と、機械的に行なわれる処置に大きなストレスを感じたことによります。“出産はアットホームな助産院でしたい”と思うようになり、前回の「りれ一随筆」の筆者である加藤さんに正木助産院を紹介してもらいました。

37週に入るまでは、病院と助産院とのかけもち受診でしたが、何とかもちこたえられたので助産院での出産が可能になりました。37週に入ってから一生懸命身体を動かして、よく歩いたことを思い出します。

39週3日で陣痛が来て、助産院に行き、内診してもらいましたが「まだ1指開大」ということで児心音の確認だけしてもらって、外出することになりました。友人の家で1時間ほど入浴させてもらっていると陣痛がどんどん強くなり、助産院に戻りました。

3cmという時点で破水し、破水してから陣痛は更に強くなるし、怒責はかかるしで、叫ぶことでストレスを発散したため、本当に野獣のお産のようでした。経過は早く、その後2時間程で3020gの元気な男の子を出産することができました。

病院では、入院と同時に分娩監視装置に縛られて、家族や友人から離れた分娩室でのお産が当た



Tosiko.o

り前ですが、私は主人と友人に見守られて、一緒に陣痛と戦って出産することができたことに本当に感謝しています。産後2時間後から母児同室もできたので、横に眠る自分の子をビデオやカメラで撮影したり、泣き出したら乳首を含ませてみたりと、子供と一緒に過ごす楽しい時間を、産後すぐから体験させてもらいました。

阪神大震災体験

そんな幸せな時間も、産後に休養をとるために実家の明石に戻ってすぐ、あの阪神大震災にあったという間に終わってしまいました。

家は壊れ、私は生後9日目の新生児を抱えて寒空の中、放り出されてしまったのです。母乳の分泌がまだ軌道に乗っていない頃だったので、“ミルクのお湯をどうやって確保するか”で私の頭の中はいっぱいでした。想像もしない出来事に、ただただ悲しく、泣いてばかりで、家族や周りの人の親切に甘えるだけの情けない母親だったと思います。

震災後2日目の朝、主人が迎えに来てくれて自宅に戻ることにしました。普段なら1時間程の帰路が、15時間もかかり、日も暮れ、車は渋滞で動かず、用意していたミルクのお湯は冷め、子供のミルクの飲みは悪くなってくるで、やっと自宅に着いた時は涙が止まらなかった……。

ホットとしている間もなく、子供の熱を計ると38°C。ミルクの飲みは悪くなる一方なのでまたまたパニック。病院に行くと、診断は感染症ということでCRP以外は異常なく、10日間程の入院で済みました。10日とはいえ、ずーっと一緒だっ

た自分の子供と離れ離れになる時は、病院にいるから安心という気持ち半分、淋しくってしょうがないという気持ち半分で複雑な気持ちでした。

予定通り5日目で点滴も抜け、CRPも下がったので10日目に退院となり、やっと親子3人の普通の生活に戻ることになりました。しかし、いざ子供が退院してきても、楽しくなるはずの育児がうまくいかないのです。産後すぐに床上げすることになり、私は連日の子供との面会のための病院の往復と、精神的ダメージで、子供が帰ってくる頃には体力的にも神経的にもダウン寸前になっていました。育児に神経質になり、「教科書通りにならないとダメ」と、育児ノイローゼ気味になってしまっていたのです。半年程かかって、徐々に以前の自分に戻っていったと思います。

助産婦を死ぬまでやっていきたい

妊娠も出産も育児も、1つの流れのようにごく普通に通過していくものだと思っていた私にとっては、何もかもが想像とは違ったものでした。自分と同じように、妊娠中、あるいは産後の育児でいろいろな悩みやストレスをもつお母さんたちは多いと思います。自分の経験がこれからのケアや、お母さんたちとの関わりの中に生かされるよう、これからも助産婦の仕事を死ぬまでやっていきたいと思っています。

あれから3年、ちなみに私は、ただ今妊娠36週、“経産婦”を経験している最中です。

次は、3人のお子さんの母親でばりばり仕事をこなすパワフルな女性、奥善美さんを紹介します。